

## 短期海外研修の学びと異文化コミュニケーション教育

藪田 由己子

### Outcome of Short-term Study Abroad Program and Education for Intercultural Communication

Yukiko Yabuta

本研究は、短期海外研修参加者が提出する報告書の記述から、参加者の学びは何か、それは異文化コミュニケーション教育の観点とどのような関連があるのかを明らかにしようという試みである。56名の記述から学びと思われる部分を取り出して分析を行ったところ、参加者は海外研修を通して文化一般的、文化特定の両方の要素を学んでおり、それらは34コード、10カテゴリーに分類することができた。異文化に触れる中で、知識の広がり、積極性の向上、語学学習意欲の向上、伝えることの難しさは多くの参加者が学んだことであった。異文化コミュニケーション教育の3領域では、認知領域で4つ、情意領域で3つ、行動領域で3つのカテゴリーを得ることができ、本研究対象校の海外研修プログラムは3つの領域でまんべんなく学びを提供していることが観察された。そして、現地関係者とのかかわりが海外研修の学びと最も深く関係しており、参加者はかかわりの中で葛藤し時には喜びを感じ、状況を観察しながらさまざまなことに気づき、それらを新たな知識や視野、意欲、積極的な行動やコミュニケーション力の向上に結びつけていると結論づけることができた。

キーワード：短期海外研修、異文化コミュニケーション教育、異文化理解教育、グローバル人材

#### 1. はじめに

海外での学習がもたらす体験が、外国語運用能力や専門知識の獲得だけでなく、異文化適応能力やコミュニケーション能力など、社会で活躍していくために必要な能力を育成することは広く認知されてきた。文部科学省も『経済社会の発展をけん引するグローバル人材育成支援』を推進し、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材、とりわけ豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を見につけ、国際的に活躍できるグローバル人材の継続的な育成の重要性を示している。そのため、多くの大学でも従来の留学や海外研修に加えて、フィールドワーク、国際ボランティア、海外インターンシップなどが盛んに行われるようになってきた。また、近年の海外研修の傾向としては、相互理解や体験学習を中心としたスタディーツアーも増え、単なる語学学習や団体観光だけでなく、課題を持った体験や交流を含んだ国際理解教育の旅が求められるようになってきた。藤原(2013)によれば、教育機関で行われている海外研修は、団体観光の「見る旅」から自らが選んで「歩く旅」へ、そして事前学習を通して獲得された知識と現地での体験により完成される「学ぶ旅」へと変貌を遂げているという。「学ぶ旅」にしていくためには、海外での体験を学びの文脈に変換していく仕掛けをもったプログラムであることが重要であり、枠組み作りには異なる手法が用いられているが、その一つとして異文化コミュニケーション教育の枠組みをあげることができるだろう。異文化コミュニケーション

ョン教育では、認知、情意、行動の3つの領域に変化をもたらすことを目指しており、本研究はこの枠組みを使って短期海外研修の学びを検討していく。

本研究対象校は長野県の女子短期大学であり（以下本学）、8日間～16日間の短期海外研修と6か月間のセメスター留学を実施している。これまでも短期海外研修については異文化間コミュニケーションの観点から検討を行ってきており（藪田 2011, 2012, 2013）、異文化コミュニケーション教育の3領域（認知、情意、行動）すべてに変化をもたらすこと、異文化交流や外国語学習に対する動機の向上などが確認されている。しかし、これまでは検討対象が特定のプログラムであったため、今回は2013年度に行われた5つのプログラム（オーストラリア、ハワイ、台湾、韓国、モンゴル）すべてを対象として検討を行うことにした。検討の方法は藪田（2013）にならい、参加者が提出した海外研修報告書の中から学びと思われる記述を取り出してコーディングを行い、その傾向を分析することとした。本研究の目的は、①短期海外研修からの学生の学びは何か、②その学びは異文化コミュニケーション教育の観点とどのような関連があるのか、この2点を検討することである。

## 2. 研究の背景

### 2-1. 異文化コミュニケーション教育の枠組み

現在、異文化コミュニケーション教育は多くの教育機関や企業で行われている。その主たる目的は異文化間能力（intercultural competency）の育成、すなわち、「異なる文化背景をもつ人々が交流する際に生じるさまざまな問題について理解し、より効果的なコミュニケーションの方法を考察したり、実際にそのようなコミュニケーションがとれるようにすること」（石井・久米, 2013, p. 225）であり、まさに現在の社会を生きていくためのグローバル人材教育の一翼を担っているといえる。異文化コミュニケーション教育プログラムは多くのバリエーションを持つが、目的、内容、指導方法の3つから整理してみたい。

まず目的であるが、そのプログラムにおいて何をもちたいたのかによって変わってくる。Brislin（1989）は、よい異文化コミュニケーション教育は、認知・情意・行動の3つの側面に変化をもたらすとしており、これはBennett（1998）が異文化間能力向上に必要な要素としている、知識（マインドセット）、感情（ハートセット）、行動（スキルセット）と共通する。認知面とは、コミュニケーションの方法や対象文化についての新しい知識の獲得、自文化と対象文化の差異の気づき、多様性の尊重、視野の広がりや新しい考え方の発見が含まれる。情意面は、文化的背景の異なる人々に対する寛容性、他者に対するエンパシー、相手に対する感情表現、異文化適応におけるストレス対応力、感情のコントロールが含まれる。行動面では、友好的対人関係を構築しコミュニケーションを円滑に進めることができるスキル、積極性および肯定的な態度、場面に応じた役割を行動に移す力が含まれている。

内容については、Wiseman & Koester（1993）の「文化特定の（cultural-specific）」と「文化一般的（cultural-general）」の2つの領域があげられる。文化特定のとは、対象文化に顕著に見られるマナーや習慣、言語、宗教、生活様式などであり、文化一般的とは、文化の違いにかかわらず、コミュニケーション全般にかかわる能力であり、説明力、共感力、自己開示、柔軟性、調節力などがあげられる。

最後に指導方法については、知識型と体験型に分けることができる。知識型とは、いわゆる講義中心の知識注入型の指導法であり、講義、ビデオ視聴、ディスカッション、ケーススタディーなどが含まれる。一方、体験型とは経験を通して学習することであり、ロールプレイ、シミュレーション、ワークショップなどが含まれるが、実際に対象文化に身を置いて行うフィールドワークや交流活動も体

験型とすることができる。体験型では、体験することだけに焦点がおかれがちであるが、体験したことから自ら学びを見出して実際の生活に生かすことが重要であり、そのためには振り返りといった内省活動は欠かすことができない。

異文化コミュニケーション教育のカリキュラムは実施できる期間によって大きく左右されるが、目的では3つの領域に平均的に変化を促すこと、文化特定のな内容になりすぎずに文化一般的な内容も含むこと、できるだけ体験型の指導方法を取り入れることが望まれる。しかし、多くの点を網羅するには困難な場合もあるため、事前にしっかりと上記3点を検討したうえでカリキュラムを作ることが求められる。

## 2-2. 本学の海外研修プログラムの枠組み

本学での海外研修プログラムの概略を表1に示す。

表1 海外研修プログラムの概略

プログラム	日数	平均参加者	提携校	主な内容
オーストラリア	15	10	×	英語学習, ホームステイ, 現地でのボランティア活動
ハワイ	16	10	○	英語学習, 現地学生との交流授業, ハワイ文化講座, 市内見学
台湾	9	15	○	現地学生との交流授業, 台湾文化講座, 市内見学
韓国	8	20	○	現地学生との交流授業, ホームステイ, 名所旧跡見学
モンゴル	8	5	○	現地学生との交流授業, ゲルでの宿泊体験, 名所旧跡見学

上記5つの研修を使用言語で分けると、英語でコミュニケーションをとるオーストラリア、ハワイ、台湾と、主に日本語を使用するモンゴルと韓国に分けることができる。台湾は英語圏ではないが、研修期間中はお互いの共通言語である英語を使用してコミュニケーションを行っている。モンゴルと韓国は日本語を学習している学生との交流のため共通言語は日本語であるが、必要に応じて英語や韓国語、モンゴル語も使用する。本学のプログラムでは現地の人々との交流を重要な要素の1つと考え、どのプログラムにもその中核として含めるようにしている。オーストラリアには提携校はないが、ホームステイで現地社会と深く関わることができるように設定されている。

また、研修参加に加えて事前5回、事後2回の研修への出席が義務付けられており、その内容は表2のとおりである。研修終了後には各自で報告書を作成して提出する。

表2 事前事後研修の内容

事前	テーマ
1	オリエンテーション, メンバー紹介
2	異文化理解ワークショップ (言語・非言語コミュニケーションスキル, ケーススタディー)
3	渡航先リサーチ, グループディスカッション
4	渡航先リサーチ発表, 渡航の注意点, 海外での行動に対する心構え
5	渡航直前確認
事後	テーマ
1	海外研修のふりかえり, 発表準備
2	成果発表会

このような内容の研修プログラムを異文化コミュニケーション教育の枠組み（文化特定の—文化一般的、知識型—体験型）に当てはめてみると、表3のように表すことができる。プログラムによって4つの領域の濃淡はあるが、表1の概略と照らし合わせてみると、どの研修も4つの領域をカバーしているといえることができる。

表3 異文化コミュニケーション教育の枠組みに当てはめたプログラム内容

	文化特定の	文化一般的	実施時期
知識型	渡航先の言語、生活習慣、気候、交通、歴史、	言語・非言語コミュニケーション方法講義	事前
	食習慣などのリサーチと発表	異文化対応のケーススタディー	研修
体験型	伝統文化体験活動、市内観光、名所旧跡訪問	現地学生との交流活動	現地
	フィールドリサーチ、インタビュー活動	ホストファミリーとのコミュニケーション	活動

### 2-3. これまでの試み

本学の海外研修については、これまでに3回の検討を行ってきた。藪田（2011）では韓国研修に参加した23名を対象にし、Brislin and Yoshida（1994）の異文化トレーニングの枠組みを使用して、研修後の状態についてアンケート調査を行った。アンケートで得られた結果を、Brislin（1989）の認知、情意、行動の枠組みに照らし合わせ検討したところ、認知と情意に変化は見られたが、行動の変化は顕著ではなかったという結果を得た。これは、行動の変化を起こさせるには研修期間が十分ではなかったこと、韓国滞在中にコミュニケーション行動を促すような仕掛けが十分でなかったことが判明したため、藪田（2012）では、行動の変化を促進するコミュニケーション・タスクを取り入れた。その結果、タスクは現地での交流活動を活発にし、3つの領域すべてにおいてプラスの影響をもたらしたことが観察された。

藪田（2013）では対象を台湾研修に変更し、質的な検討も加えて参加者の学びについての調査を行った。台湾研修に参加した学生29名から提出された海外研修報告書の「海外研修を通して得たこと、学んだこと」の章で記述されているテキストを分析対象とした。まず、学生の学びや得たことと思われる記述を書き出してセグメント化し、コーディングを行った。その後、コーディングしたものの共通点に従って上位概念としてカテゴリーに分類し、Brislin（1989）の3つの領域に当てはめて分析を行った。その結果、141コード、18カテゴリーが得られ、3つの領域では、認知カテゴリーが10、情意カテゴリーが5、行動が3であり、カテゴリーでは認知の領域に分けられたものが一番多かった。しかし、コード数で見ると、3つの領域はほぼ同じ割合であり、この研修は異文化コミュニケーション教育の3領域においてバランスよく参加者に学びを提供していたことが分かった。その中でも、情意に関してはほぼ全員が報告書に記述していたことから、当該研修は参加者の情意に変化をもたらすものであったことが分かった。

得られたカテゴリーと実際の記述内容を再検討してみると、18のカテゴリーは、「英語力の向上と英語学習の必要性」、「コミュニケーションに対する積極性」、「新たな知識の習得」「自文化理解の必要性」、「台湾人学生ホスピタリティ」の5つの学びにまとめることができた。このことから、短期であっても、異文化交流や外国語学習に対する動機向上と、新しい知識の習得による考え方の変化をもたらすことができると結論づけた。

本研究では、藪田（2013）で行った研究方法を踏襲し、その対象を台湾研修以外にも広げて参加者

の学びを明らかにすること、その学びは異文化コミュニケーション教育の観点とどのような関連があるかを検討することを研究課題とした。

### 3. 研究方法

#### 3-1. 参加者

本研究の対象者は2013年度に行われた海外研修プログラム参加者であり、オーストラリア4名、ハワイ10名、台湾13名、韓国25名、モンゴル4名の56名である。研修期間および研修の主な内容は表1のとおりである。参加者は研修終了後に報告書を提出するが、その中の「この研修を通して得たもの、学んだこと」の章に書いてある記述を分析対象とした。参加者全員が報告書を提出していたので、56名分の記述を対象とした。研修内容はすべてのプログラムで異なるが、英語を使ってコミュニケーションを行っていたオーストラリア、ハワイ、台湾を英語圏（27名）、韓国とモンゴルを非英語圏（29名）として2つのグループに分けた検討も行った。

#### 3-2. 分析方法

学びや得たものの抽出には、定性データ分析ソフトウェアのMAXqda 11（VERBI GmbH社）を使用した。本ソフトウェアは、文書データの管理、文書データに対する編集及びコーディング、コード間の関係に対する概念モデルの構築、特定のコードに対する複数の文書セグメントの抽出という特質を持ち、質的分析を行う際の効果的なツールの一つである（佐藤, 2008）。はじめに文書をMAXqda 11に読み込み、それぞれの記述の中から文脈に注意しつつ学びや得たものと思われるものを選んでセグメント化し、オープンコーディングを行った。全てのコーディングが終了した時点でそれぞれの記述に戻って再検討を行い、コード名を整えた。その後、コーディングしたものの共通点を見出し上位概念としてグルーピングを行って、カテゴリーを作成した。

さらに、異文化コミュニケーション教育の観点で検討を行うために、得られたカテゴリーを認知、情意、行動の3つの領域に当てはめて検討を行った。3領域に当てはめる際には、藪田（2013）で使用した下位要素（表4）を使用した。

表4 異文化コミュニケーション教育の領域と下位要素

認知	理解, 新しい知識の習得, 気づき, 考え方, 視野, 判断保留
情意	感受性, 受容性, 柔軟性, 感謝, 驚き, オープンネス, 楽しさ, 辛さ
行動	コミュニケーション, 対人関係構築, 積極性, スキルの習得, 肯定的な態度

### 4. 結果と考察

#### 4-1. コードについての全体的な傾向

分析の結果、34コード、10カテゴリーを得た。10のカテゴリーは、認知領域で4、情意領域で3、行動領域で3であった。実際のコードとカテゴリーを表5に示す。EおよびNEはそれぞれ英語圏、非英語圏を示しており、数字はコードが付与されたセグメント数を示しているため、この数字を学び・得たものの数とすることができる。まずは、コードについて全体的な傾向を検討したい。

表5 分析から得られたカテゴリーとコード

領域	カテゴリー	コード	E	NE	合計
認知	現地の文化・状況に起因する気づき	違いに気づく	4	8	12
		現地学生の英語力の高さ	3	0	3
		現地学生の意識の高さ	0	4	4
		日本文化の再認識	4	3	7
		英語の必要性	0	2	2
		共通語としての英語	2	0	2
	人間関係に対する気づき	家族の大切さ	3	0	3
		助け合うことの大切さ	3	2	5
		思いやりの心	0	1	1
	知識や視野の広がり	視野の広がり	3	2	5
		知識の広がり	11	12	23
	考え方の変化	ステレオタイプからの脱却	3	6	9
		グローバルな感覚	1	0	1
		異文化理解の大切さ	1	0	1
	情意	現地関係者とのかかわり	現地の人の温かさ	4	8
海外の友人を得た喜び			2	4	6
異文化交流の楽しさ			3	0	3
コミュニケーションの葛藤と喜び		伝えることの難しさ	13	6	19
		英語コミュニケーションの喜び	6	0	6
		コミュニケーションの喜び	0	2	2
意欲の向上		語学学習意欲の向上	11	8	19
		コミュニケーション意欲の向上	5	2	7
行動	コミュニケーション力	コミュニケーション能力	2	4	6
		非言語コミュニケーションスキル	1	9	10
		異文化コミュニケーション力	2	3	5
		語学力の向上	9	0	9
	積極性	積極性の向上	15	4	19
		向上心	0	1	1
		自信が付いた	4	2	6
		自立心	1	1	2
	一歩踏み出す力	行動力	5	3	8
		恥ずかしがらない	1	0	1
		自己主張	0	1	1
		自分の意思を伝える	0	2	2
		合計	122	100	222

一番多かったのは「知識の広がり」の23（E:12, NE:11）であり、本学のプログラムは参加者に新し

い知識をもたらすことには有効であることが確認された。新たな知識としては、生活習慣（食習慣やマナー）、体験授業を通して学んだ異文化（韓国式茶道や礼儀作法、台湾語の授業、台湾伝統文化の講義、フラ、ハワイアンレイ製作）、毎日の生活で見られる国の事情（交通事情、商店での買い物の様子、伝統的建造物の歴史、パールハーバーでの戦争の歴史など）の記述が多く見られた。記述の中では事例AからCのように、現地の人と交流しなければ得られなかった情報から知識を広げているケースも見られ、これが海外研修を行う一つの意義であると考えられる。体験して得た知識は、注入された知識よりも参加者の記憶に深く残っていくからである。

事例A「(現地で行ったアンケート調査で)台湾の男子学生は大学卒業後1年間兵役にいくということと、就活は大学在学中にはやらず、卒業してから就活をすることが普通ということを学びました」

事例B「(ゲルでお世話になったガイドから)モンゴルでは死ぬ前に、三つのことを行わなければいけない、一つは子供を産むこと、二つ目は木を植えること、三つ目は本を書くことだと教えていただきました。これは、自分を残すために行うと教えていただきました」

事例C「ハワイの循環バスにも車椅子用の席があり、たまたま車いすの人が乗ってきた時に、そこに座っている人たちが躊躇せず立ち上がり、場所を譲っていた。運転手さんは、自動でバスのスロープを出し、その場にあった椅子を片付け、車いすが入るスペースを作っていた。誰もが自然にこのような行動がとれるのは、幼い頃から体に不自由がある人に親切にすることを学んでいるからかもしれない。日本も高齢者や障害を持つ人が数多くいる。こういう優しさを見習いたい」

知識の広がりについて、「積極性の向上」「語学学習意欲の向上」「伝えることの難しさ」がそれぞれ19で続いた。「積極性の向上」では、自分から積極的に話しかけた、わからないことを聞いてみた、多少自信がなくても思い切って英語を使ってみたとの記述のように、現地関係者（ホームステイ先や提携校の学生）との交流において参加者が能動的にコミュニケーションをとっていたことがうかがえた。また、初めて見る食べ物に挑戦する、地図をたよりに街を歩くといった、未知のものに対しても積極的に行動していたことも観察された。そして、その結果得られた充実感を事例Dのように記述している例も多く見られた。

事例D「電車に乗ってみる、人に道を尋ねてみる、あかすり体験に行ってみるなど、何でも挑戦してみました。日本にいれば、わからないことはやらずに辞めてしまったことも多かったのですが、韓国では、まずやってみるという気持ちを持つことが出来ました。その結果として研修が有意義になったと思います」

「語学学習意欲の向上」と「伝えることの難しさ」はある意味結びついていると言える。参加者の記述には、伝えようとしたが自分の語学力不足のためにうまく伝わらず、その結果としてもっと語学力を向上させなければならないという、事例EやFに見られるような思いが多数つづられていた。これは目標言語が話されている場所での研修では頻繁に見られる情景であり、海外研修が教室内の学習だけでは喚起が難しい、語学学習意欲の向上に大きく関与していることを示している。

事例E「台湾の学生は一生懸命私に話しかけてきてくれるが、聞き取れなかったり、単語が出てこなかったり、そのために話がすぐに終わってしまう、だけでもっと話したいと、もどかしく感じる 때가たくさんあった。このことから自分の英語の力のなさに気がつきもっと頑張らなくてはならないと改めて学ぶことができた」

事例F「韓国語の発音も地元の人にちゃんと伝えられないことが多々あり、同じことを言っているのに発音の仕方ひとつでこうも違うのかと感じさせられ、ショックを受けたと同時にもっともっと話せるようになりたい、自分の意志を不自由なく伝えられるようになりたいと感じた」

このようにコーディングを行うことで、参加者の学びの傾向を見ることができた。異文化に触れることで、新しい知識を得ること、積極的に行動すること、コミュニケーションに苦勞した結果、語学学習意欲が向上したことは多くの参加者が得たことであった。新しい知識については、やや表層的なものも多く、価値観や思考などの深層的なものはあまり見られなかったが、これは研修期間が影響していると思われる。しかし、そのような中でも事例Gに見られるような「ステレオタイプからの脱却」といった、やや深い気づきも見られた。

事例G「まず、ハワイに来て私の中の変な思い込みを変えてくれたことが一番大きなことでした。ハワイには現地の人々だけでなくいろいろな国から来て住んでいる人々が多く、特にアジアから来ている人が多かったです。ニュースや新聞を見ていると今、日中韓の問題が多く、私の中国や韓国の印象は正直悪かったです。でも、ハワイに行っているいろいろな人々と関わり、もちろん私の苦手だと思っていた中国や韓国の人々とも話してみても、私は関わってもいなかったのになんて勝手な思い込みをしていたんだろうと自分のふがいなさを痛感しました。みんないい人ばかりで日本の話をしたらすごく興味を持ってくれて、私はとても嬉しくなりました」

このような段階まで到達させるには、事前学習や出発前までの授業を通して知識を蓄えておく必要がある。この参加者も1年間異文化コミュニケーションの講座を履修して知識を持っていたからこそ、このような学びを得ることができたのだと考える。自分が持っている異文化コミュニケーションのスキーマに照らし合わせて経験をメタ認知的に分析することができるようになれば、学びはさらに深くなっていくだろう。

#### 4-2. 英語圏と非英語圏での相違点

英語圏と非英語圏で、セグメント数の多かった上位5つのコードを表6に示す。順位は2つのグループで異なり、英語圏は「積極性の向上」、非英語圏は「知識の広がり」が1位となった。また、両方に入っていたコードは、「知識の広がり」と「語学学習意欲の向上」であった。

表 6 英語圏と非英語圏のコード上位 5 位までの比較

	英語圏	非英語圏
1	積極性の向上	知識の広がり
2	伝えることの難しさ	非言語コミュニケーションスキル
3	知識の広がり	語学学習意欲の向上
4	語学学習意欲の向上	現地の人の温かさ
5	語学力の向上	違いに気づく

英語圏での 5 コードからは、「積極的に行動したり英語でコミュニケーションをとったりした結果、新たな情報を得て知識が広がり、語学力も高まった。その一方で、自分の語学力のレベルでは英語で伝えることの難しさを感じ、語学学習意欲が向上した」と読み取ることができる。英語圏の研修では、オーストラリアはホームステイで、ハワイと台湾は提携大学の学生との交流が含まれており、現地関係者との交流がこのような結果を生んだと考えることができる。特に台湾では研修期間のほとんどを現地大学生と共に過ごすため、英語を使って親密に関わることが可能であった。その結果として、上記 5 つのコードに含まれる記述の割合は他のプログラムよりも高かった。交流量の豊富さに加えて、台湾研修の参加者はある程度のレベルの英語力（実用英語技能検定 2 級程度）を有しており、研修出発前までに修得したことを使ってみる準備（readiness）ができていたことがその理由のひとつとして考えられる。これらのことから、現在の英語圏でのプログラムで学びを生み出している鍵は、現地の人たちとの目標言語（英語）による関わりや活動であり、英語力のある程度持っている方が学びは促進されるということができるだろう。

非英語圏の 5 コードからは、「新しい文化に触れて知識が広がり、日本文化との違いにも気づいた。また、現地の人とのかかわりでは温かさを実感し、非言語コミュニケーションを使って意思を伝えようと努力すると同時に、言語の重要性にも気づき語学学習意欲が向上した」とまとめることができるだろう。英語圏の研修と異なり、相手の言語（韓国語・モンゴル語）を使ってのコミュニケーションは難しい。提携大学の学生は日本語を学習しているが、ホストファミリーや街で出会う人々は日本語を理解できるわけではなく、コミュニケーションでは困難を伴うことが多かったようである。そのような時には、ジェスチャーや表情などの非言語コミュニケーションスキルを使って何とか意思疎通を図ろうとした様子が事例 H からうかがえる。

事例 H 「ホームステイではお互い母国語しか話せなかったため、会話がほとんどできなかったが、その中でも参鶏湯やチヂミを一緒に作ったり観光やサウナへ出かけたりした。会話ができなくてもジェスチャーや手振り身振り、翻訳機を使ってお互いに頑張った。もちろん韓国語もたくさん教えてもらい、たくさん話した」

「違いに気づく」に関しては、研修場所の影響もあると考える。モンゴルや韓国の生活環境や文化は、表層的な部分でも日本と異なる点が多くある。特にモンゴルは草原のゲルでの体験がプログラムに含まれており、体験することすべてが参加者にとっては新しい文化であったと言ってもよい。そのような日本とのギャップが大きい環境では、違いに気づく機会も多かったことがこのような結果になったと考える。逆に韓国と日本では同じような習慣もあるが、事例 I のように実際に見てみると違い

がわかったというような記述も見られた。

事例I「電車に乗って気づいたのが、優先席ではないところに座っていても、お年寄りや妊婦さん、自分より年上の人に対して席を譲るということで、日本人は譲るのに躊躇してしまう部分がありますが、そんな感じではありませんでした。立っている人がいるのに優先席は空いているという状況も見かけ、日本ではあまり見かけることがなかったので、韓国人は優しいなと感じました」

優先席は日本にも存在する概念であり参加者もよく知っている事柄であるからこそ、韓国での優先席の概念が違うことに気づくことができている。表層的な部分はあるが、海外研修に参加することによって自文化との対比をすることが可能になっている事例であると考えられる。文化差が大きい時にはもちろん違いを感じるが、比較的近い文化だからこそ気がつく違いもあるということがわかる。

#### 4.3. カテゴリーと異文化コミュニケーション教育の3領域

前章ではコードについて述べたが、次にカテゴリーと異文化コミュニケーション教育の3領域との関係について述べる。34のコードを、類似点や記述の特性を検討しながら10のカテゴリーに分類した(表5)。そしてそれらを、表4を参考に異文化コミュニケーション教育の3領域に当てはめてみたところ、認知領域では「現地の文化・状況に起因する気づき」「人間関係に関する気づき」「知識や視野の広がり」「考え方の変化」の4カテゴリーが得られた。情意領域では「現地関係者とのかかわり」「コミュニケーションの葛藤と喜び」「意欲の向上」の3カテゴリーが、行動領域では「コミュニケーション力」「積極性」「一歩踏み出す力」の3カテゴリーが得られた。得られたカテゴリーとそこに該当するコードとセグメントの合計数を表7に示す。

表7 異文化コミュニケーションの3領域のカテゴリー

領域	カテゴリー	コード数	セグメント数
認知	現地の文化・状況に起因する気づき	6	30
	人間関係に対する気づき	3	9
	知識や視野の広がり	2	28
	考え方の変化	3	11
情意	現地関係者とのかかわり	3	21
	コミュニケーションの葛藤と喜び	3	27
	意欲の向上	2	26
行動	コミュニケーション力	4	30
	積極性	4	28
	一歩踏み出す力	4	12

ここからは、カテゴリーと3領域の特長を見ていきたい。まず認知領域では、気づきに対して2つのカテゴリーが得られた。1つは、習慣の違いや人々の振る舞い、現地学生の英語力の高さや勉強に対する熱心な姿、共通語として使われている英語の実態など、「現地の文化や状況に起因する気づき」である。この気づきの結果、日本文化の再認や英語学習の必要性を感じている様子がみられた。もう

一つは、「人間関係に対する気づき」であり、特にハワイ研修で観察された。ハワイ研修では学生同士が自炊をしながら共同生活を行うが、家族と離れて生活した経験のない参加者たちは、改めて家族のありがたさや不慣れた土地で仲間と協力していくことの大切さに気づいていた。このように、自文化から物理的に切り離される体験は普段の生活では難しいが、海外での生活を機会に自信を得て、自立した人間になることも可能であることを示唆している。

「知識や視野の広がり」と「考え方の変化」はある程度連動しているようにも考えられる。新しい文化に触れることによって「知識や視野の広がり」が起こり、その結果ステレオタイプからの脱却などの「考え方の変化」が起こっていると思われるが、この部分が海外研修の重要な要素の1つだろう。新しい知識はいわゆる知識注入型の教育でも得ることはできるが、そこから考え方に変化を起こすにはパーソナルな体験は欠かせない。国内においても自文化と距離のある文化に出会って刺激を受ければ同じような変化を起こすことは可能であるが、文化差が大きい環境の方がその変化は起こりやすい。

次の情意領域では、「現地関係者とのかかわり」、「コミュニケーションの葛藤と喜び」、「意欲の向上」の3つのカテゴリーが得られた。情意面での変化とは、感情や意欲に対して何かしらの変化をもたらすことであるが、参加者の情意面での変化は「現地関係者とのかかわり」によって得られたものが多い。現地の人とのコミュニケーションでは、ほとんどの参加者が自分の語学力では思いが伝わらない経験をしており、そこでは葛藤も生まれるが、伝わった時の喜びも同時に感じている。また、その結果としてもっとコミュニケーションを取りたいという思いや、語学力を向上させたいという意欲の向上に結びついている。人間は他者や社会との相互作用を通して知識を構築し、意欲や態度を変化させていくが、今回の結果はまさにそのことを実証していると言える。

最後に、行動領域では、「コミュニケーション力」、「積極性」、「一步踏み出す力」の3つのカテゴリーが得られた。行動領域での変化も情意領域と同様に、交流やコミュニケーションする相手があつて初めて変化が起こると考えられる。事例Jからもその様子が見えてくる。

事例 J 「私は積極性と探求心を身に着けることができたと思う。私はいつも自分に自信がなく、英語で何か話すときにも間違っていたらどうしようと思ってしまうことが多い。しかし今回の台湾研修は、常に台湾の学生たちが私たちのお世話をしてくれていたのだから、日本人だけでかたまって行動してしまうことも少なく、台湾の学生たちとたくさん英語で話をする機会があった。たくさん話すには、自信がないにもかかわらず、英語をひたすら聞いて自分でも口にするという行為が必要になってくる。ここから私は積極性を身に着けることができたのだ」

行動領域で見られた記述の多くは、現地学生やホームステイ先の家族とのコミュニケーションにおいてであった。そしてそのやりとりを通して語学力が上達し、非言語スキルも含んだコミュニケーション力を身につけていったのだろう。このように異文化コミュニケーション教育には、相手の顔が見える交流は欠くことのできない、必ず含むべき要素であるだろう。

#### 4.4. 学びのカテゴリーとプログラム内容の関連

ここまで参加者の記述から海外研修の学びについて考察してきた。最後に見方を少し変えて、プログラム内容と学びを結びつけて考えてみたい。10の学びのカテゴリーを、参加者の記述を参考にしながら異文化コミュニケーション教育の内容の枠組みである「文化特定の」と「文化一般的」に当てはめると表8のようになった。

表8 学びと異文化コミュニケーション教育内容の枠組み

内容	カテゴリー	現地での活動
文化特定の	現地の文化・状況に起因する気づき	伝統文化体験授業
	知識や視野の広がり	市内観光
	現地関係者とのかかわり	名所旧跡訪問
		フィールドリサーチ ホームステイ
文化一般的	人間関係の気づき	現地学生との交流活動
	考え方の変化	ホームステイ
	コミュニケーションの葛藤と喜び	海外での共同生活
	意欲の向上	
	積極性	
	コミュニケーション力 一歩踏み出す	

文化特定の学びに3カテゴリー、文化一般的な学びに7カテゴリーが分類された。海外研修では文化特定の学びが中心と考えられている傾向もあるが、今回の調査から見えたことは、文化一般的な学びの多さである。積極性、コミュニケーション力、一歩踏み出す力、高いモチベーションなどは、近年いわれている社会人基礎力やグローバル人材力に通じるものであり、海外研修はコミュニケーション力をはじめとした、人間力の育成に貢献していることが確認された。表8にあるように学びが得られたと思われる活動は、現地学生との交流活動、ホームステイ、海外での共同生活であり、文化一般的な学びはすべて人とのかかわり、特に現地関係者とのかかわりから生まれていることがわかる。人とのかかわりは国内でも可能であるが、海外ではお互いの言語が理解できない場合が多く、そうになるとコミュニケーションのハードルも必然的に高くなる。その結果、コミュニケーションをとるためには相当の努力を要することになり、ここから学びが生まれてくるのであろう。

文化特定の学びにおいても、知識の広がりや現地文化に対する気づきも現地の人とのかかわりから生まれており、ここでも交流の大切さがあげられる。また、ある文化に特化した体験授業や市内観光、名所旧跡の訪問などを通して、参加者は文化に対する理解を深め、新たな知識や気づきを得たので、直に文化を体験できる活動を研修の中に取り入れることは重要である。

これまでのコード、カテゴリー、3領域の考察は、「現地関係者とのかかわりは、海外研修の学びの鍵である。参加者はかかわりの中で葛藤し時には喜びを感じ、自分の置かれている状況を観察しながらさまざまことに気づく。そしてそれらを、新たな知識や視野、意欲、積極的な行動やコミュニケーション力の向上に結びつけていく」とまとめることができ、図1のように表すことができるだろう。

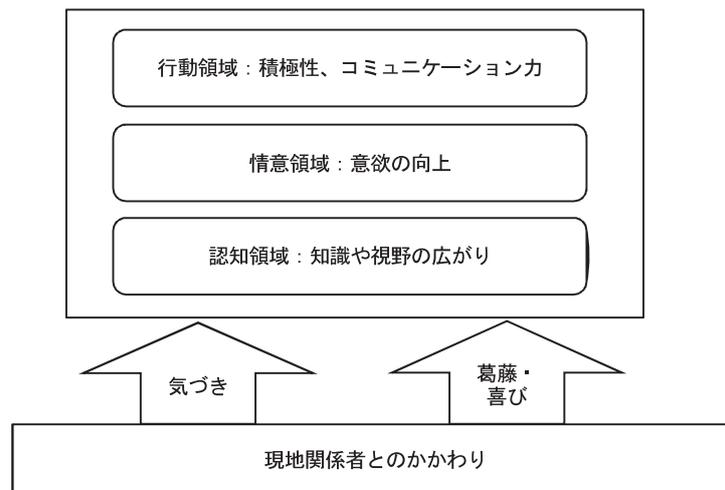


図1 海外研修を通しての学び

## 5. まとめ

本研究を通して得た研究課題に対する答えは次のようなものであった。第一に、短期海外研修からの学生の学びは何かという問いに対しては、参加者は海外研修を通して文化一般的、文化特化的の両方の要素を学んでいるという答えを得た。参加者の報告書の分析からは34コード、10カテゴリーの学びが得られた。異文化に触れる中で、知識の広がり、積極性の向上、語学学習意欲の向上、伝えることの難しさを多くの参加者が学んだ。また、英語圏と非英語圏を比べてみると、英語圏では積極的に英語でコミュニケーションをとった結果、新たな情報を得て知識が広がり英語力も高まったことが確認され、非英語圏では、新しい文化に触れて知識が広がり、日本文化との違いにも気がつくと同時に、非言語コミュニケーションスキルを使いながら、現地の人々と交流を行っているという結果が得られた。そしてどちらのグループにおいても、伝えたいことが伝えられないというコミュニケーションの難しさを感じて、語学学習意欲が高まったことも観察された。

第二に、参加者の学びは異文化コミュニケーション教育の観点とどのような関連があるかという点については、異文化コミュニケーション教育の3領域にあてはめて検討を行ったところ、認知領域で4つ、情意領域で3つ、行動領域で3つのカテゴリーを得ることができ、本学の海外研修プログラムは3つの領域でまんべんなく学びを提供していることが観察された。そして、コード、カテゴリー、3領域の特性を考慮した考察の結果、現地関係者とのかかわりが、海外研修の学びの最も重要な要素のひとつであることが確認された。参加者は人々とのかかわりの中で葛藤時には喜びを感じ、状況を観察しながらさまざまことに気づき、それらを新たな知識や視野、意欲、積極的な行動やコミュニケーション力の向上に結びつけていると結論づけることができた。

今後の課題として2点あげたい。1点目は学びの質を深めることである。知識の広がりは見られたものの表層的文化の気づきにとどまる傾向が多く、気づきに対してもそれを深めてなぜそうなるのかを考えるような機会には至っていない。事前事後研修の内容の改善や、帰国後の授業との関連で工夫を行い、貴重な学びを発展させていきたいと思う。2点目は研修を通じ得られた意欲の向上を持続させることである。海外研修終了直後は非常に高かった意欲も、その後何もしなければアクションには結びつかない。特に語学学習意欲については、自律的に学習ができるような仕組みを考えていきたいと思う。異文化コミュニケーション教育の最終的な目標は、学びを社会へ還元できる人材の育成であ

る。海外で得た知識や行動力を自己の学びの成果として自覚して、社会貢献に役立てて行ってもらいたいと願う。

## 引用文献

- Bennett, J. (1998). Intercultural Communication: A current perspective. In M. Paige (Ed.). *Education for the intercultural experience* (2<sup>nd</sup> ed.). Yarmoth, ME: Intercultural Press.
- Brislin, R. (1989). Intercultural Communication Training. In M. K. Asante & W. B. Gudykunst (Eds.). *Handbook of International and Intercultural Communication*. Newbury, CA: Sage Publications.
- Brislin, R and Yoshida, T. (1994). *Intercultural Communication Training: An Introduction*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Wiseman, R. L., & Koester, J. (Ed.). (1993). *Intercultural communication competence*. Thousand oaks, CA: Sage Publications.
- 石井敏・久米昭元 (編). (2013). 『異文化コミュニケーション事典』 横浜：春風社.
- 佐藤郁哉. (2008). 『質的データ分析法－原義・方法・実践』 東京：新曜社.
- 藤原孝章. (2013). 「スタディツアーにおけるプログラムづくり－「歩く旅」から「学ぶ旅」への転換」『国際理解教育』 Vol. 20, 42-50.
- 簗田由己子. (2011). 「異文化交流プログラムにおける意識調査－韓国と日本の大学生のケーススタディーを通して」『清泉女学院短期大学研究紀要』 30, 47-61.
- 簗田由己子. (2012). 「短期海外研修におけるコミュニケーション・タスクを用いた異文化交流プログラムの試み」『清泉女学院短期大学研究紀要』 31, 62-78.
- 簗田由己子. (2013). 「短期海外研修から参加者は何を学んでいるのか－異文化コミュニケーションの観点から－」『清泉女学院短期大学研究紀要』 32, 31-44.

## SUMMARY

The present study investigates 56 Japanese college students participating in a short-term study abroad program, and tries to understand what they learned from the program. The students' reports were analyzed qualitatively, and 10 categories and 34 codes were obtained. These results were examined according to the cross-cultural training framework (Brislin, 1989), which consists of three areas: knowledge, emotion and skill. The results indicated that: 1) students' outcome were found in both cultural-general and cultural-specific areas, 2) students' outcome were equally found in the three areas of cross-cultural training framework, 3) "interaction with local people" is one of the most important factors for an effective study abroad program.